

## 静岡市から見た富士山の顕明度と 南偏風との関係について

佐々倉航三\*

静岡大学教育学部研究報告第8号(1957)において筆者は望月誠君と共著で「静岡市から見た富士山の顕明度に就いて」と題して小論を発表した。昭和30年(1955)に1年間毎日午前10時に望月君が静岡市から富士山の顕明度を6階級(備考参照)に区分して観測し、その資料を両人が統計的にまとめたものであった。その結果は富士山の顕明度の年変化の実体を明らかにし、且それを富士山頂における湿度の年変化との間に密接な負の相関があることを知ったが、後者は現象学的に考えても寧ろ当然すぎなくらいのことである。

筆者は顕明度の年変化から考察して顕明度をおとす要因は南偏風にあることに早くから着目したが、最近極めて簡単な方法でこのことをはっきりと突きとめることが出来たのでここに不取敢報告しておきたい。

調査の対照に採った顕明度は各月のものではなく春夏秋冬の4季における平均のものに限ったが、この値は上記論文中の第171頁に次のように出ている。

第1表

春	夏	秋	冬
1.03	0.77	2.27	2.83

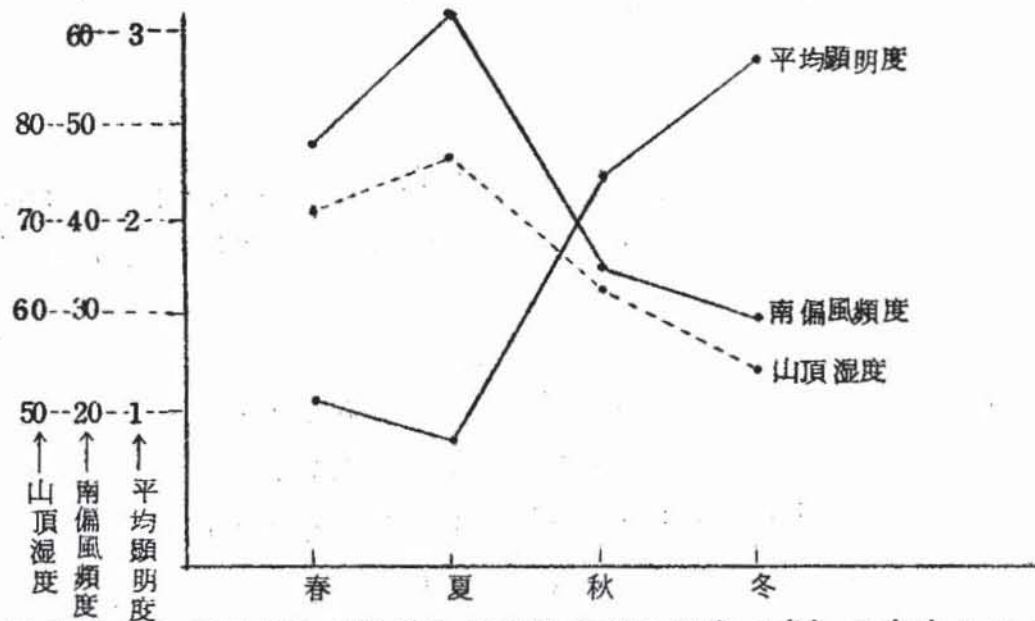
次に筆者が同じ教育学部研究報告第8号中に松田英二君と共著で「静岡における風向と天気との関係に就いて」なる小論を発表したが、その中の第161頁には昭和15年4月から昭和24年12月までの毎日正午春夏秋冬の4季における静岡の各風向頻度の全観測回数に対する百分率を表示してある。同表によれば南偏風については次のようになっている。

第2表

	春	夏	秋	冬
SSE	17.0	19.8	10.9	10.4
S	24.1	30.2	18.6	14.5
SSW	6.9	11.5	5.5	4.7
計	48.0	61.5	35.0	29.6

試みに第1表の春夏秋冬の平均顕明度と第2表の南偏風(SSE、S、SSWの百分率の合計)との相関(負)を図示すれば次のようになる。

(2)



南偏風の百分率頻度と顕明度とが意外なほどに密接な相関（負）を有することがわかるであろう。すなわち南偏風の出現頻度が大きいほど平均顕明度がおちるのである。

静岡市から北東方へ標高3 軒8 の富士山頂に至る（水平距離約 5 4 軒）仰角約 4°内の途中何れかの部分の大気が混濁すれば顕明度がおちるわけであるが、これは駿河湾上を北上する比較的湿度の高い南偏の気流が富士山体の南斜面を強制上昇するために生じる一種の凝気によるものと考えることが出来よう。強制上昇する気流の温度が露点に達しなくとも可成りの高湿度に達すれば凝気を生起し易いことは既に事実として知られているところである。

これらのことは春夏秋冬の富士山頂の平均湿度と静岡の南偏風頻度の百分率との相関が同図に見られるような平行関係にあることから充分に推察されるのである。

富士山頂の平均湿度は次のようである。

第 3 表

春	夏	秋	冬
7 0.2	7 6.0	6 2.5	5 4.6

尙詳細適確な調査は引続いて行いたいと思っている。（昭和 3 3 年 1 2 月静岡大学気候学研究室にて）

備考 顕明度 0：降雨のため、又は雲霧に掩われて見えない。 顕明度 3：かすんで見える。

1：かすんで見えない。

4：普通に見える。

2：かすんでかすかに見える。

5：はっきり見える。